

雪霸国家公園のオシドリ

孫 元 勲

訳 福井和二

雪霸国家公園域内の七家湾には貴重な生物がいることを誰もが知っている。数多くの珍しい鳥類、中でもオシドリは誰もが知るところで、羽色の美しいこと、陸まじいつがい行動など、人々に強い印象を与える。

野生のオシドリの分布は、中国大陸、ロシア、日本などで、百年ほど前にイギリス人 Swinhoe が台湾の淡水山系で採取した一対の標本で、オシドリの台湾留鳥説を実証した。現在では誰もが台湾に野生のオシドリが生息していることを知っている。主要な繁殖地は中程度の標高にある湖沼で、南勢溪と大甲溪の上流一帯、その他彼らが生息するほとんどの地は深い淵、あるいは緩やかな浅瀬といった平穏な水域を好み、これらの地域は、本島の東部の溪谷中であるためオシドリの姿を見かけるのは難しい。

調査資料によると、台湾の野生オシドリは約 500 羽ほどで彼らが最も多く生息している地域は雪霸国家公園内の大甲溪流域で、2001 年に 156 羽が観察記録された。その主要な分布範囲は七家湾溪、有勝溪、高山溪、南湖溪、司界蘭溪さらに最もオシドリの数が多く景観も優れた大甲溪主流と德基ダムなどである。これらの中には 100 羽以上の群れが記録されているところもある。彼らが多く集まる德基ダムは日当たりのよい松の茂みに囲まれた水域で、「オシドリダム」とも言われている。

德基ダムのオシドリ群が飛ぶ姿が見られるのは秋から冬で、このような季節的な行動現象は寒中に顕著に現れ、春には幕を閉じる。丁度この頃の七家湾溪は観光シーズンではなくなる。

これら両地域のオシドリ群の相互関係を知るために、3 年間、70 羽のオシドリを捕獲し、発信機を装着して放し、追跡を行ったところ、七家湾溪のオシドリは、繁殖期に結ばれた番は 8 月頃には完全に雌雄が分離し、德基ダムへ移り、遠いものでは 30km 下流の谷関ダムへ現れる。おもしろいことに、すぐ近くの七家湾溪の水源にある蘭陽溪では 1 羽のオシドリも飛来せず、大甲溪の両ダムに吸い寄せられている。

オシドリは、一般のカモ類と同様、雑食性で主な採食時間は明け方と黄昏どきで、彼らは常に、岸辺を泳ぎながらセリの葉やピロードイチゴの果実、イネ科の草の実などを食し、また水辺で休息しているカエルも彼らの美食の膳に変えられる。オシドリはヤゴなど、水生昆虫を偶然見つけると、持ち前の潜水技術を発揮して捕食し、さらに、藻類や水中に落ちた桑の実、ミミズなども食べる。彼らは採食が終わると、水中で羽づくろいをした後、岸辺で次の採食時間まで休息をとる。この調査を通して、桜の花から小魚に至るまでオシドリの食物の幅の広いことがわかった。

オシドリの体重は雄が平均 573g、雌が約 40g^{*}。雄の外型は非常に美しく、特に、古人が「想い羽」と言い、外国人が「帆羽」と言う一対の橙色の羽は、次列風切羽の第 12 番目が特化した羽毛で、その美しさは、外国のガンカモ研究者でさえ、オシドリはこの世で最も美しいカモ類だと称賛せざるを得ないと言う。

古来からオシドリは、貞節とロマンという印象を人に与えてきた。これは、全て昔の文人たちが詠んだ歌によるところが大きい。なかでも唐の詩人孟郊の詠んだ「烈女操」に「梧桐相待老、鴛鴦会双死、…」(アオギリは共に老いを待ち、鴛鴦は共に死ぬ)と書かれ、盧照鄰の「長安古意」の中に「…得此比目何辭死、願作鴛鴦不羨仙」(このヒラメ²を得るならば、死をも辞せず、自ら

鴛鴦となるを願ひ、仙人を羨まず)と書かれ、これらの詩は、「広い世間のどこかに、自分を理解してくれる女性がいるのだろうか」と理想の異性を求める男を励ます詩である。

鴛鴦はこのとおり中華文化の中で最も興味津々で語られる鳥類で、全て一対の夫婦の象徴として扱われる。たとえば、「鴛鴦大盗」³、「鴛鴦浴」⁴、「鴛鴦火鍋」⁵、「毒鴛鴦」⁶、「苦命鴛鴦」⁷など、一連の鴛鴦という二文字のもつ意味は妙である。鴛鴦という字を解くと、鴛は鴨の雄を、鴦は雌を意味し、各々の鳴き声の違いをあらわしている。

しかし、オシドリは本当に古人が描いているように情が深いのだろうか？ これは彼らの物語により言われていることで、大甲溪のオシドリの研究によりわかったことは、オシドリの性別による個体数は均衡を欠いており、したがって、1羽の雌の周りには通常2羽以上の雄がいて、女日照りの状態のなか、雄は常に春を求めて追慕しなければならない。これにより武陵一帯の単身雄の流動性が高くなる。このほか雌個体の少ない社会問題は、秋になると早々に雌を巡って追求、攻撃、配偶者を求める争いが展開される。この時期はつがい関係が未だ不安定で、冬から早春を待つて緊密な配偶関係が出来てくる。雌雄が新しいつがいを組む例はなく、もどどうりのつがいだといわれている。とはいえ、オシドリが一夫一妻の道を守ることは少なく、雄は抱卵と育雛を分担せず、抱卵が始まると巣から離れていくのは、他のカモ類と同様、一季一婚姻型である。

しかし、飼育下のオシドリは元の鞘におさまる例が多く、現在の僅かな研究の例ではつがいの組み替えを見ることは出来ない。其の主要な原因は野外でのオシドリは死亡率が高いことが関わっていると思われる。オシドリの死亡原因の大方7割は天敵の捕食により、その多くが哺乳類のイタチとオオタカ、ウオミズクなどの猛禽によるといわれる。研究者によると、当地における雄オシドリの死亡率は30%、雌は50%近くに及ぶという。言い換えれば、雄の半数近くが、1年のうちに配偶者を失い、たとえ生きていたとしても、雌を失った痛手は大きく、彼らの配偶の機会を大いに低めている。

水ぬるむ春を鴨は先に知る。七家湾と有勝溪の3月はゆっくりと寒さに別れ、万物が目醒め、オシドリが騒ぎ始め、雄同士の派手な争いが演じられる。雌は争って集まる追跡者のうちの1羽に積極的に心を示す。この季節は非常に頻繁に交尾行動が行われ、雌はまず首を曲げた後に伸ばして水面に貼り付ける、この時雄は同じ動作で応え、雌の後方より背中へ乗る。しかし、状況は敵に囲まれている中で、雄はなんと、突然の覇者となり、あわてて後先もない行動に終わってしまふこともある。

オシドリの巣造りは、溪谷周辺の原始林にある樹洞が利用され、樹洞の口は地上から10~20m、樹洞の深さ50~60cmで、雌は腹部と胸部の絨毛を巣の底に敷いて産卵する。1巣の卵数は通常7~12個で、黄土色の卵の重量は約45gである。雌は1日に1回夜明けに約1、2時間採食に出かける。時には樹洞の口に止まって休息することがある。

4週間ほどして卵は孵化する。巣立ったヒナの足は十分に機能し、親鳥の後に従って歩くことができる。危険に出会えば、速やかに草むらに隠れ、あるいは水中に避難する。50~60日も過ぎるとヒナは飛べるようになり、7、8月頃には親と共に自由に飛び廻り、下流の南湖溪、司界蘭溪あるいは德基ダムまで飛んでいくようになる。この時の幼鳥の体色は母親と似ており、ただ、胸部の羽毛がまだ模様である。生後4~5ヵ月で成鳥と同じ羽色となる。一部若鳥の雌は翌年再び同じところで繁殖するが、雄は繁殖地へは戻るものが少ない。

雄は早いもので8月になると全身換羽が始まり、雌と同じような羽色となる。少しずつ顔の色が変わっていき、あらかじめ秋の恋愛準備期へはいる。この頃の写真によると、風采が上がらない姿で、このまま冬をむかえる。どうしてこんなに老いばれといわれるような姿になってしまう

のか人々は理解に苦しむ。

雪霸国家公園は他の国家公園と異なる独特稀有な資源を持ち、これらは自然の宝でもある。これらが、天災や人災の脅威に、常にさらされているこんにち(森林火災、洪水、土砂崩れなど)、国家公園管理所は世論の支持と激励のもとに、全力を尽くして、この美しい溪流の貴重な鳥が永遠に飛び続け、さらに増えるように努力することを期待したい。

訳注

- °1 400gの間違いか?
- °2 中国ではヒラメ・カレイの類もオシドリと同様夫婦仲のよい魚とされているようです。
- °3 鴛鴦大盗とあり、おしどり泥棒と訳した。夫婦で行う泥棒のこと。
- °4 鴛鴦浴とあり、おしどり風呂と訳し、夫婦で入る家族風呂とでもいうのか。
- °5 鴛鴦火鍋、シャブシャブのことを火鍋ホーゴウとといい、重慶の特産に鴛鴦火鍋というのがある。一方は辛いスープで、他方は辛い味のないスープで食べるシャブシャブのこと。今では中国全体で食べられている。
- °6 毒鴛鴦とは、心根の悪い夫婦、悪党夫婦とでもいうべきか。
- °7 苦命とは不運という意味で、苦命鴛鴦と不運な夫婦となる。